

Tea Time Talk with Midori ●Photographer Satoshi Teradate

「文化財への援助を通じて、その地域に住む人々の自助努力をうながし、尊厳を呼び覚ますことが大切だと考えています。」



対談連載

12

~ Guest ~

日本画家 日本美術院理事長
平山郁夫

ひらやま いくお
1906年、広島県生まれ。1929年、東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科卒業。1953年、同大学日本画助手。少年時代の模体練習、平和を軸心を弘教五葉の巻（少口）に重なり、1968年、ナリシクロドリ（シグロドリ）を描き終り、1991年、ワラのギメ国立美術館を皮切りに、ワシントンD.C.北宮、東京で平山郁夫シルクロドリ展を開催。さらに仏教文化遺産である中国敦煌の保護をきっかけに「世界文化財赤十字構想」を提唱し、世界の文化遺産救済に尽力。1999年、東京藝術大学長。1993年、文化功労者となる。2000年に奈良興隆寺玄奘三蔵院「大聖西遊壁画」を完成（彩）日本美術院理事長、ユネスコ親善大使、世界文化遺産担当特別顧問ほか。2001年、国際交流基金常任代表を務める多くの賞を受賞。



西浦みどりのアフタヌーンティー

西浦 今日はお越しいただきましてありがとうございます。先日「日本経済新聞」の夕刊連載記事も、楽しく拝見いたしました。横山大観先生をはじめ、昔のそうそうたる大御所の先生方のお名前がたくさん出てきて、平山先生はまさに歴史の生き証人。改めて、感銘を受けました。平山 遠くからお目にかかった方は

おられますが、私の場合はおそらく当時の偉い先生にはぜひ多く多く接する機会に恵まれましたね。
西浦 ただ会話をするだけでなく、大先生方も平山先生を非常に評価され、自分が育てたというお気持ちで可愛がっていらつやうたんでしようね。
平山 それは本当に幸せなことでした。大観（横山）先生とは62歳、青柳（前田）先生とは45歳違うんですが、東京藝術大学という組織のなかで、教授と助手という役目でなければできないことだったでしょうね。若いときからいろいろな方にお会いできて、誠にありがたいことです。
西浦 それはもちろん、先生の才能とお人柄があつたことだったのだと思います。新聞の記事で、お酒を勧められたときのあのエピソードがおかしくて（笑）。
平山 今と違って当時は師匠と弟子で、教わる時以外はおいそれとお会いできない。ましてや口をきいたり同席するなんてことは、考えられない時代ですよ。そんな師匠から「注いでやるから、飲みなさい」とついぶん勧められて、つい調子づいちゃったんですよ。そんなにお酒も強くないのに、勢いでしたね（笑）。
西浦 当時でしたらやはりご遠慮するものでしょうか？
平山 藝大では、私の父と同じくらいの歳の方が上司ですからね。当時は戦後派、アフレ・ケールというものがありませんが、先生たちが若いときにはもちろんそんな雰囲気ではなかった。上下関係も厳しかったそう、
「君はいいね、そういう点ではあまり厳しくないお師匠さんが目を掛けてくれて。すぐ上にあがるよ。変に遠慮してもつらいから、素直にやりなさい」といわれたので「そうですか」とお返事しました。こいつは無遠慮なやつだなんてね。そういう点では珍しがられましたね。
西浦 今の学生さんたちはいかがで

「君はいいね、そういう点ではあまり厳しくないお師匠さんが目を掛けてくれて。すぐ上にあがるよ。変に遠慮してもつらいから、素直にやりなさい」といわれたので「そうですか」とお返事しました。こいつは無遠慮なやつだなんてね。そういう点では珍しがられましたね。
西浦 今の学生さんたちはいかがで



平山 学生たちは割合素直ですよ。昔と違ってもうひとつ礼儀を知らない学生もいますけどね(笑)。

西浦 そうですね。ひと昔前に人類という表現が流行りましたけど…。

平山 先生の研究室に入っても、入れたまま、ポケットに手を入れたままなんです。悪気はないんですが、知らない。私はそういうとき学生をちよつと君、米なさいって呼んでね、「今はそれでいいかもしれないが、就職するときにそんなことをすればいつべんに落とされるよ」と教えてやるんです。不思議そうな顔をされますがね(笑)。

西浦 それは学生にとつてもありがたいことですね。普通は教えてくれないもの。

平山 小学校、中学校、高校と、そんなこと教えてくれないんです。もちろん本来ならば、家庭で教えることですけれど。私が注意すると、二度目からはきちんとしてくるんです。そういう姿には、戦時中だったけれど自分の若い頃を思い出しますね。

西浦 画だけではなくいろいろなことを教える必要はないから、大変ですね。

平山 若い時に寝なりをきちんと身に付けたほうが、後になっていろいろなるものを選択しやすと思うんですよ。

ことを伝授してきました。そうしたら、ステキな生徒さんたちが更に魅力的になりましたもの。ところで先生は世界中を旅されて、特にシルクロードに関しての作品群でもたいへんご高名でいらつしやいます。また、お育ちになられた瀬戸内海の自然、青い海や空などが先生独特の群青色や緑を生むのに影響を受けてらしたと聞きました。

平山 田舎の山海で生まれたり、都会で生まれたり、その人の運命のようなものがありますよ。しかし、生まれ育った環境で同じように教育を受けても、感性はそれぞれに違いますね。都会で育った人でも、親御さんや先生方が努力して、ときどきピクニックで大自然に親しむことで、自然や日本の美を実感させてほしいですね。それは将来、子供がどんな方向にいても非常に役に立つことですから。昔は意識せずにそういうことができていたと思うんですが、今は田舎でもどんどん開発されていて、様子も違ってきましたね。教育そのものが実利的で、必要なものだけをやるようになった。けれど、専門課程に入る前の幼児期から高校くらいまでに、自然などから受けた感性と本などから身に付けた教養があれば、その後、自分がどの方向に進むのかといった理念を築くときに、幅と奥行きが出るんです。これは後で身に付けようとしても、難しいことですから。美術や音楽、体育などの情操や基礎体力づくりは、受験とは関係なくとも将来に役立つはずなんです。

西浦 まったく同感でございます。僥越ですけれど、私自身、いま先生が仰られたところあるべしという教育をイギリスのボーディングスクールで受けさせていただきました。そこで学んだことがバックボーンとなって、今日役立って助けられています。

平山 イギリスでは、紳士・淑女教育だけでなく、リーダーを育てる教育でも定評がありますね。残念ですが、最近では平然と殺人が横行し、親が子供を殺したり、その逆もある。人間性が失われていっていますね。情緒が欠けているんだと思いますよ。

西浦 恐ろしいことですね。残酷な内容のコンピュータゲームが氾濫し、子供の頃からそういうものにも制限なしにフリーアクセスを許してしまう環境になってしまいましたから、何をか言わんやで…。

平山 早くなんとかしなければ、日本国が危ないですね。心の教育もね。

西浦 えっ？ ころの教育…。実は、3冊目の拙著のタイトルです。ありがとうございます(笑)。

平山 環境は大事ですよ。そうした意味で、本当の教育とはどういうことであるかという点で、戦前の教育制度は非常にしっかりしていたんです。エリートが指導者になり、中間の人がいて、思索したりする人がいた。身分制というじやなく、その人の能力に応じていたんです。しかし今は皆、平等です。すなわち今も皆、平等です。するとどうしても低いほうに合わせることになってしまいますから。

西浦 それぞれの個性を知って育てることが重要ということですね。

平山 知的に伸びる人、運動ができる人、いろいろな人がいます。それを知能指数だけで一律に良いか悪いかと判断すると、偏食で栄養不足にすぐなる(笑)。

西浦 ビッターな表現ですわね。先生のお言葉、ひとつひとつ、とつても説得力があつて、心に響きます。

平山 そうですか。嬉しいですね。

西浦 新聞の記事を拝読した際に、最初にフランスのルブル(美術館)で美術をはじめとした西洋文化に触れ理解したからこそ、今の先生の日本の神秘的な世界に辿り着かれたとおっしゃっていました。先のお口からもう一度お願いします。

平山 それはね、こういうことなんです。実際に世界に行つて体験しないと。今はリアルタイムにいろいろな情報を瞬時に得ることができるようで、それで解つたように錯覚してしまうんですね。

西浦 確かに情報だけは氾濫しています。

平山 実際は長い時間をかけて、アジア各国やアメリカなどの大陸、中東諸国、アフリカの国々も、今ある文化を築いてきたんですが、それが環境やなにかで違つていて。そういうものを、生まれ育った日本文化や相手の文化はどういうものであるか、足元をしっかりとしながら違う文化圏に接していくことで、共有できる部分や違いが見えてくる。

平山 環境は大事ですよ。そうした意味で、本当の教育とはどういうことであるかという点で、戦前の教育制度は非常にしっかりしていたんです。エリートが指導者になり、中間の人がいて、思索したりする人がいた。身分制というじやなく、その人の能力に応じていたんです。しかし今は皆、平等です。すなわち今も皆、平等です。するとどうしても低いほうに合わせることになってしまいますから。

西浦 それぞれの個性を知って育てることが重要ということですね。

平山 知的に伸びる人、運動ができる人、いろいろな人がいます。それを知能指数だけで一律に良いか悪いかと判断すると、偏食で栄養不足にすぐなる(笑)。

西浦 ビッターな表現ですわね。先生のお言葉、ひとつひとつ、とつても説得力があつて、心に響きます。

平山 そうですか。嬉しいですね。

西浦 新聞の記事を拝読した際に、最初にフランスのルブル(美術館)で美術をはじめとした西洋文化に触れ理解したからこそ、今の先生の日本の神秘的な世界に辿り着かれたとおっしゃっていました。先のお口からもう一度お願いします。

平山 それはね、こういうことなんです。実際に世界に行つて体験しないと。今はリアルタイムにいろいろな情報を瞬時に得ることができるようで、それで解つたように錯覚してしまうんですね。

西浦 確かに情報だけは氾濫しています。

平山 実際は長い時間をかけて、アジア各国やアメリカなどの大陸、中東諸国、アフリカの国々も、今ある文化を築いてきたんですが、それが環境やなにかで違つていて。そういうものを、生まれ育った日本文化や相手の文化はどういうものであるか、足元をしっかりとしながら違う文化圏に接していくことで、共有できる部分や違いが見えてくる。

平山 環境は大事ですよ。そうした意味で、本当の教育とはどういうことであるかという点で、戦前の教育制度は非常にしっかりしていたんです。エリートが指導者になり、中間の人がいて、思索したりする人がいた。身分制というじやなく、その人の能力に応じていたんです。しかし今は皆、平等です。するとどうしても低いほうに合わせることになってしまいますから。

西浦 それぞれの個性を知って育てることが重要ということですね。

平山 環境は大事ですよ。そうした意味で、本当の教育とはどういうことであるかという点で、戦前の教育制度は非常にしっかりしていたんです。エリートが指導者になり、中間の人がいて、思索したりする人がいた。身分制というじやなく、その人の能力に応じていたんです。しかし今は皆、平等です。するとどうしても低いほうに合わせることになってしまいますから。

西浦 それぞれの個性を知って育てることが重要ということですね。

平山 知的に伸びる人、運動ができる人、いろいろな人がいます。それを知能指数だけで一律に良いか悪いかと判断すると、偏食で栄養不足にすぐなる(笑)。

西浦 ビッターな表現ですわね。先生のお言葉、ひとつひとつ、とつても説得力があつて、心に響きます。

平山 そうですか。嬉しいですね。

西浦 新聞の記事を拝読した際に、最初にフランスのルブル(美術館)で美術をはじめとした西洋文化に触れ理解したからこそ、今の先生の日本の神秘的な世界に辿り着かれたとおっしゃっていました。先のお口からもう一度お願いします。

平山 それはね、こういうことなんです。実際に世界に行つて体験しないと。今はリアルタイムにいろいろな情報を瞬時に得ることができるようで、それで解つたように錯覚してしまうんですね。

西浦 確かに情報だけは氾濫しています。

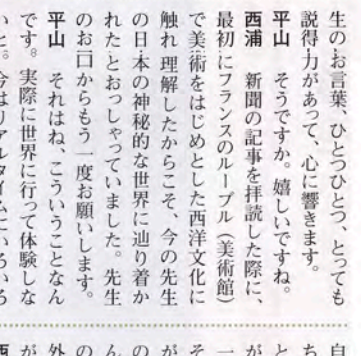
平山 実際は長い時間をかけて、アジア各国やアメリカなどの大陸、中東諸国、アフリカの国々も、今ある文化を築いてきたんですが、それが環境やなにかで違つていて。そういうものを、生まれ育った日本文化や相手の文化はどういうものであるか、足元をしっかりとしながら違う文化圏に接していくことで、共有できる部分や違いが見えてくる。

平山 環境は大事ですよ。そうした意味で、本当の教育とはどういうことであるかという点で、戦前の教育制度は非常にしっかりしていたんです。エリートが指導者になり、中間の人がいて、思索したりする人がいた。身分制というじやなく、その人の能力に応じていたんです。しかし今は皆、平等です。するとどうしても低いほうに合わせることになってしまいますから。

西浦 それぞれの個性を知って育てることが重要ということですね。

平山 知的に伸びる人、運動ができる人、いろいろな人がいます。それを知能指数だけで一律に良いか悪いかと判断すると、偏食で栄養不足にすぐなる(笑)。

西浦 ビッターな表現ですわね。先生のお言葉、ひとつひとつ、とつても説得力があつて、心に響きます。



自分のアイデンティティをしつかりもちながら、お互いに成熟していくことが重要だと思います。ところが戦後、それらが全部含まれて一緒にたなつてしまった。本当にそれをつくり、築いた人はいいてすが、わけも解らずついでにただけの人ばかりを見失つてしまった。どんな生き物でもすべ、歴史や進化の流れのうへにありませ。自分は国外に違いと理解を共有していくことが一番理想的だと思つています。

西浦 はい、そのとおりです。非常に貴重なお話を賜りました。やはり先生が本物でいらつしやるから、私たちに教えていただけるものも蓄積も深く大きいのだと思ひます。先生のご高名は海外にも行き渡つておりますし、常に精神的に活動が続けいらつしやいます。今後のプロジェクトについても教えてくださいます。

平山 ずっと日本を拠点に東西文化・交流を追いかけようという源流を求めて歩き出しました。すると例えれば、どういう状態で今ここに居るのか、エジプトの文明やインダス川流域の文明といったものが、よつてたかつて途中の人々に影響を与えながら、日本まで辿り着いたんですね。日本は今まで自然や純日本のなローカルの暮らしをやりながら、前進した文化を展開しているんです。が、(外からの刺激も自ら)変化して取り入れることで、感性をさらに高めてきた。春夏秋冬がきめ細かくあり、狭く小さい土地ではありますが、非常に叙情的で、細やかな神祕があります。花鳥風月で白砂青松。そこで外国に連れていくと、自然の在り様も考え方もまったく異質なことに気付く。この兼ね合いをどこまで自覚し、どのように入れていくかが明治維新以降の命題だったのですが、その問いかけ

を自分にもしています。日本文化の源流を追いながら、どのようにして築かれたのかを勉強しているんです。その異質のものを自分の心眼、日本の美しい自然で磨かれた感性で、違った味の砂漠や生き物、暮らしを、見たものを昇華させて象徴的に描こうと思つています。

西浦 先生の画は拝見して吸い込まれそうですわ。特に群青色が神秘的で、本当に独特の魅力があります。

平山 青、特に群青色は日常的な色ではないので、それを使うことによつて幻想的な、違う世界が描けるんですね。青、赤、緑と、それぞれの色にふさわしいモチーフにあてはめて描いています。

西浦 先生は海外にお出かけになられるときは、必ず奥さまも一緒にいらつしやいます。芸術という、お互いに理解し合える世界をお持ちでいらつしやるのはとてもステキなことですね。

平山 それと、同じように勉強してきた相手なので、本来ならばひとりで準備したり、現地でも何か探さなくてはならないというときも、解るんですね。

西浦 同級生でいらつしやいましたね。本当にあうんの呼吸で。

平山 いろんな役目がありますね。やりたい立場の奥さんがいても、全然理解がなかったり、足手まといなこともありましたから、解らなければ全然あてにしませんし、解るのならば中途半端は困る。そういう面はあると思ひますね。

西浦 なんと思われていらつしやるんでしょ！先生にとつて理想的なパートナーでいらつしやいます。でも、それも先生に才能と魅力があまりだからそういう方がお嫁さんにならしたんですね。

平山 創作活動・画家生活も60年になり、結婚して50年になりました。

西浦 金婚式ですわ。おめでとございます。

平山 ありがとうございます。

西浦 ありがとうございます。

平山 ありがとうございます。

平山 自分では直接画を描かなくても、私が描くことで一緒に進化していますね。解るんですよ。だから非常に怖い批評家でもありませんよ(笑)。あまり人が言わないことも、おかしかったらズバと言いますし、また、言われたほうが私のためにもなりますね。

西浦 こういう場で披露してよろしいかしら。この前、お食事のときに先生がおっしゃったお話。平山 はは、あれね(笑)。自分ではもう仕上がったと思って緊張感を抜いたら、家内に「これから仕上げた(笑)。やっと晩酌でもとわって、やれやれと安心してしまったあとにね。自分の作品を見るときに共通しているのは、いたわろうと思つて悪いようには見ないんです。本当はいちばん厳しい目で見ると、そこから、悪い条件で自分の作品をさらす。自分に厳しいということ、は、粉飾しないということ。常に厳しく徹しなくてはと、絶えず思っていますね。

西浦 その、悪い条件で見るといのはどういうことなのでしょう。平山 例えばですが、画廊であればこの画に対してどのくらい光量があればよいのかがあります。服の生地を選ぶときにもそうなんです。太陽の下で見るとさきりです。そこをいい加減にすると、よく見えません。ムード照明なんかはダメですね(笑)。美術品の真贋を見るときにもそうです。

西浦 太陽光線のもとに出すんですね。平山 それこそ白日のもとです。まず、中身というか、画のもつ精神性なんて吹っ飛ばしてしまます。密度や完成度に気持ちが入っているかどうか。

西浦 日本ではよく「お天道さまに嘘はつけない」と言いますが、本当なんですか。

平山 それはもう、はつきりしますね。厳しいものです。

西浦 でも、奥さまはたとえ良い条件でご覧になられてもズバとおっしゃるんですね。まだこれから仕上げなくちゃいけません(笑)。

平山 居合、抜きと同じなんです。文学などはストーリーがありますから、どんなものでも冒頭から終わりまできつちりと、どこか良いところがあるんじゃないかと(笑)、探しながら読みます。ところが、画は瞬間の勝負です。パッと見ただけで解ります。審査する場合でも、すごいものさうでもないものは明らかです。自分の画でも、疲れて言い訳した画、逃げた画などは一目瞭然ですよ。そういうときは外出したり気分転換をして、また直すんです。

西浦 ご自分に厳しくあるということですね。それから文化財の赤字構想。私も文献で拝読いたしました。平山 どんな国でも訪れる文化遺産、遺跡などをもつていますね。しかし貴重なそれらが、植民地化や内紛などによって壊されたり盗まれたりすることがある。それを平和的に解決する方法として、「文化財赤字」をつくり、文化財を守る。同時に、そこに住み、守っている人も救うのです。いろいろな問題がありますが、まず、いちばん困っている人を救わなくてはなりません。ところが、災害や内戦などでアフリカや中近東に救援物資を送ると、被災者がその食糧をあてにするようになり、ペットのように売られて働かなくなるんです。その兼ね合いが難しい。自助努力で立ち直れるよう、人間的な誇りを呼び覚まして、技術的にも経済的にも同時に支援しながら文化遺産を守っていかねばなりません。以前の文化財の発掘ブームのなかで、自分の国へ持って帰る人もいました。今は現地でも保存して、人も助けるようにあり方が変わってきています。

す。日本もそういうことで国際貢献するといわれていますね。西浦 大変素晴らしいことです。ところで先生はユネスコの親善大使でもいらつしやいますね。平山 もう十数年になりますね。西浦 その親善大使として、今おっしゃった構想を主に「提案」されています。平山 ユネスコでは国際的に大きく協力する場面もありますが、国際機関や政府機関が動き出すには、やはり時間がかかります。ですから、私はまず、個人的にそういう要請が皆の注目を浴びるように提案したいといつた、つなぎの役目をしていいます。交番のおまわりさんのようなものですね。喧嘩をしている人がいれば、自転車で巡って行って仲裁したり、注意する。お医者さんでいえば、自分のところでは手に負えないようなものを大病院に紹介したり、その間に患者さんを元気づけたりする。そして本格的な医療、治療を施していくんです。

西浦 それで文化財の赤字構想と。平山 信条的にはそうですね。どんなデザインのものでも、どの民族がつくったものでも、人類の文化遺産として、次代に伝えていくことが重要なんです。それには人と物の両方を助けなければなりません。西浦 重要なことですね。それから、先生が藝大理事長(東京藝術大学)としてご在職中に「藝大世界発信プロジェクト」委員を仰せつかりました。まずは、第1回目のメイン行事として「ユネスコ60周年記念演奏会」もごさいいますね。平山 そうですね、よろしくお願ひしますよ。日程も来春で決まりました。ちょうど、今のユネスコの事務局長が日本人(松浦光一郎氏)なんです。日本は第二次大戦で世界中と戦って敗れました。二度とこういう戦争を起こしてはならない、しめせんと念じて60年です。

文化面での国際貢献、そのための技術力や経済力、理念がしっかりしていないと、中国や韓国を含む東アジアが懸念しているような国ができてしまうと思うんです。口で言ってもなかなかいろいろな問題がありますから、態度できちんと示さなくてはなりません。日本そのものは17世紀から19世紀末まで、国際的な戦争は一度もしていません。その点ヨーロッパ各国は、その時代に何十回も戦争をして、それによって科学技術や外交技術が発展してきた。日本の幕府や武家政権は武力を持ちながら平和に統治する、農民を豊かに平和に統治するのが名君で、戦争が好きだといふ者はお取り潰しになっていきました。本質的には日本人は、穏やかな、礼儀正しい、清潔な農耕民族なんです。ただ、ときどき間違えて外国を攻めたりすると、火傷する。その後遺症が60年経ってもありますね。日本人の本来の性質を発信すれば、よく理解されると思うんですが、自己表現が下手ですね。

西浦 察する美学もありますし。平山 いろいろな国の人々が、帰化したり住むようになってきて、だんだん変わってきています。いい意味での日本の特性を生かす発信は、やはり文化ではないでしょうか。西浦 はい、そして繰り返して、何度でもこちらの立場を説明しないとダメなんです。平山 解つてもらえるだろう、では通じないんですね。西浦 本当にそうですね。私は毎年、パリ政治学院の要請でシアン・ボの生徒たちに日本についての講義をしているんです。驚かされるのは、大統領を何人も輩出しているエリート校の生徒たちでも

いまだに、日本人は日本刀を振りまわして、いつ戦争を始めるか解らない国というイメージを抱かれています。このところ、ですから私の授業では、政治経済の講義のなかに、日本人の美德や古来からの心のあり方を説明した上で、例えば奥ゆかしさから物を言わず、結果、誤解されてしまうことがあるということ、さまざまな具体例をあげて話しているんです。

平山 画の場合でも、外国の方は遠近法があり、奥行きがあつてという話を合理的にされるんですが、日本の場合には紙の上に一本線を描いて、空白に想像させるんです。これは日本人だけにわかることで、そうでない合理主義的な考えの人にはよく理解できないんです。ですから、わかるように説明しなければならぬ。日本の構成や美しさ、情感を言葉で説明するだけの理論武装がないとダメですね。西浦 仰るとおりです。一にも二にも説得力のある説明とコミュニケーション能力がないと生きていけないのです。先生が生み出す偉大な芸術に、理論武装、言葉がセットになれば鬼に金棒ですね。平山 「藝大世界発信プロジェクト」は、たいへん意義ある組織ですから、ひとつ頑張つてもらつて藝大のためにも日本や世界のためにもなるようにしたいですね。西浦 はい、受け賜りました。私以外にも強力な委員がいらつしやいますし、過日、宮田亮平学長をおたずねして、お話を伺つて参りました。平山 いろいろな意味で戦後60年が経ち、敗戦の後遺症がじわじわ引いてきた気がするんです。ある人の言葉を借りれば、親から孫の世代になりますから、小さい孫をまず教育して日本を再生していく。いろいろな意味での家庭の躰、親の愛情が大事ですね。西浦 愛情の力はとても大きいですわ。

平山 特にこれから少子化社会を迎えますが、猫かわいがりは愛情じゃないですか。戦争に負けた頃に戻った気持ちで、もう一度やり直さなくてはなりません。現在の社会を見ても、破綻していますからね。

西浦 そう、その破綻がすごい状態です。戦後の混乱を知っている人から聞きまじったけど、今は、かつての戦後のドサクサに似ているとか。全てが急に下品になって、何でもあり、犯罪も増えました。一方、新しい価値観のもと、今までに類を見ない発展も多々生まれているということがあります。それが本当に原点に戻つてやり直していくことでしょうか。平山 今はまだ日本には貯金があります。中国、インド、韓国がどんどん力をつけてきています。しっかりと勉強し、頑張つていかなくてはなりません。

西浦 今日は大変素晴らしいお話をたくさん受け賜ることができました。ありがとうございました。



にしうらみどり
国際コンサルタント・評論家
(オピニオンリーダー)
東京生まれ、英国育ち。インベスター・リレーションズを主とする国際金融と都市開発(商業・住宅等)のコンサルタント会社社長として契約企業・団体多数。テレビのニュース情報番組では、ユーモアたっぷりの辛口コメントで、中高生からシルバー世代まで幅広い支持を得ている。特に若い女性には、講演・著書を通じてエレガントなエグゼクティブのお手本としても人気。政府委員、日本赤十字社医療センター外部評価委員も務めている。5冊目の著書「大人の品格」(PHP研究所)が好評発売中。

ボランティアで取材にご協力いただき、ありがとうございました。